○日本植物に關する最近の外國文獻（四）（原　寛）

この項では戰時中のものを一先づおき主に昨年（昭和 22 年）出版された新しい文獻から拾つてみる事にした。

松田英二氏は 'On the genus *Mitrastemon*' と題し Bull. Torrey Bot. Cl. 74: 133～141, fig. 1～11 (1947) にメキシコ南部で自ら發見した *M. Matudai* Yamamoto を中心にしその詳しい記載や屬の歷史・分類上の位置・既知種・分布等に就て述べて居る。1941 年中井博士が佛印ヤツコサウを記載された事と共にこの珍稀なヤツコサウ類が漸次深く廣く知られてゆく事は頗る興味が深い。

Kobuski 博士はツバキ科の研究 XV 報として *Adinandra*（ナガエサカキ屬）を Journ. Arn Arb. 28: 1～98 (1947) で扱つて居る。東亞產の種類は p. 7～33 迄にあり 18 種擧げられ，臺灣產ナガエサカキは *A. Millettii* Benth. et Hook. var. *formosana* (Hayata) Kobuski とされ，且つ別變種 var. *cbtusissima* Kobuski が臺灣から記載された。後者は恐らく *A. obtusissima* Hayata と同一であらうとされて居る。アリサンサカキ（*A. lasiostyla* Hayata）は確認され，リウキウナガエサカキ・キールンサカキ・ケナガエサカキ・オホミナガエサカキは材料が不足の故で殆ど原記載が轉載されて居る。

Rehder 博士は同雜誌に於て牧野博士が新屬とされたホウワウヒバをヒノキの一品として *Chamaecyparis obtusa* f. *Sanderi* (Sander) Rehder (p. 253, 1947) とした。又イボタ類中オホバイボタの班入品を *Ligustrum ovalifolium* f. *aureum* (Carr.) Rehder (p. 256) とし，*L. macrocarpum* Koehne をオクイボタと同種とみて *L. Tschonoskii* var. *macrocarpum* (Koehne) Rehder (p. 257) と改めた。

臺灣產のチヤセンギリ（アヲギリ科）は *Reevesia formosana* Hayata (1920) と云はれて來たがこれには Sprague (1914) の同名があり，兩者は別種と判斷されるので，チヤセンギリに對しては *R. taiwanensis* Chun et Hsue（同誌 28: 330, 1947）の新名が與へられた。

Li (Hui-Lin) 博士は 'Notes on the Asiatic flora' 中で *Diphylleia*（サンカエフ屬）に就て述べて居る。この屬は東亞及び北米東部の全く離れた 2 地方に分布し，*D. cymosa* Michx. は Georgia から Virginia にかけ Blue Ridge 山脈の高さ 1000～1650 m の限られた地域にのみ產する。中部日本から樺太・アムールにはサンカエフ（*D. Grayi* Fr. Schm.）が知られて居る。一方支那（湖北・四川・雲南）に產するものは Diels (1900) は *D. cymosa* としたが，これは別種であつて *D. sinensis* Li（同誌 28: 443, 1947）として記載された。サンカエフとの區別點は色々擧げてあるが，花瓣と果實が小形である他はサンカエフの變化の範圍に入つてしまふ。支那產は花ある標本 1 枚果實を着けたもの 2 枚によつたもので，もつと多くの資料によらなければはつきりした特徴がつかめないと思ふ。

最近シウメイギクに關し二つの論文が發表された。一はスエーデンの Hylander 博士

による 'Notes on *Anemone nipponica* Merr. and allied forms' in Svensk Bot. Tidskr. 39: 49～64, fig. 1(1945) である。最初にシウメイギクの學名變遷の歴史を述べ，次にシウメイギク及びその近緣品に就て解說して居る。始めて學名を與へられたシウメイギクは葉下面が綠色で毛少く，多數（20以上）の內面紅紫色の狹い花被片を持つた形で，日本で知られて居るのはこの形だけである。支那（貴州・廣西）には花被片が5枚で廣卵形である外はシウメイギクと區別できない形がある。この外栽培品として古くから 'Elegans', 'Honorine Jobert' が知られて居るが，これはシウメイギクと *A. vitifolia* の雜種であると云う說は疑ふ餘地がない。印度北部產の *A. vitifolia* はブドウに似た單葉を持ち花被片は5枚で幅廣く內面は純白である。葉の下面に白綿毛を密生するのが基準形で葉が無毛に近いもの迄色々移り變りがある。北支には3出葉をもち下面に白綿毛を有する *A. japonica* var. *tomentosa* Maxim. の形が自生して居る。*A. elegans* は Hand.-Mzt. により支那に自生するものに用ひられたが花被は 8～9 枚あり，シウメイギクと *A. vitifolia* の雜種に用ひるべきである。その有力な一理由として花粉を調べた結果を引用すると，Wehrhahn が *A. japonica hybrida* とした數種の園藝品種では少くも 75 % の花粉が不完全でこれは雜種と考へる。シウメイギク及び *A. vitifolia* では少くも 90% が正常であり，この事は兩者を別種と見做す大切な理由となる。シウメイギクに他は似て唯5枚の花被片をもつ形は *A. hupehensis* の名で栽培され，これは直接支那湖北から來たものがもとで更に栽培品種ができたと思はれ，これ等の花粉は凡て貧弱であり南支產の標本でも同樣である。しかし *A. japonica* var. *tomentosa* の花粉は完全である。シウメイギクの確實な支那產自生品は知らないが上述の南支產の中間形はシウメイギクと *A. tomentosa* との雜種である可能性がある。そこで形態的にも明かに區別でき地理的分布も異なるものを種として次の5に分類できる。1) *Anemone vitifolia* Buch-Ham. ex DC. 2) *A. tomentosa* (Maxim.) P'ei 3) シウメイギク *A. nipponica* Merrill 4) *A. hupehensis* Boynton (*A. tomentosa* と *A. nipponica* の中間形), 5) × *A. elegans* Decaisne (*A. nipponica* × *A. vitifolia*)。

次に Bowles, Stearn 兩博士の 'The History of *Anemone japonica*' と題し Journ. Roy. Hort. Soc. 72: 261～268; 297～308 (1947) にでたものを紹介する。通常 *Anemone japonica* と云はれて居る植物の歴史と特徵に就ての著者等の研究は 15 年前から初められた。Japanese Anemones と云つて居るものは日本の原產ではなく，一部支那產の種から導かれヨーロッパ起源の雜種である。最初に歐洲へ輸入されたのはシウメイギクの形で，支那で古くから栽培され日本へも輸入された。この形の學名に *A. japonica* は用ひられないが *A. hupehensis* が同種であると考へる。1908 年秋フランスの Lemoine 種苗園のカタログに *A. japonica hupehensis* の名が載り，これは支那湖北に自生狀態で生えて居るもので5枚の紅紫色圓味のある花被を持つて居る。これは多分 Silvestri によつて 1902～6 年頃輸入されたものである。1910 年秋のカタログでは

A. hupehensis として取扱はれ，この名は其後多くの園藝書に出て居るが植物學上の出版は Boynton が 1931 年 Addisonia に圖解したのに初まる。*A. hupehensis* は *A. tomentosa* に似て居るが葉下面は白綿毛を密布する事なく，花粉は最初に輸入されたと思はれる植物に就て 95%完全であつた。このものは中部西部支那（湖北・湖南・四川・貴州・廣西・雲南）に自生して居る植物と一致し，多分北部ルソン・臺灣にも產する。*A. tomentosa* は栽培すると時に高さ 5 呎に達し，*A. hupehensis* より花色淡く數週間早く開花する。シウメイギクは *A. hupehensis* と花被の數と形を除き全く一致し，後者の半八重品に過ぎないと考へ，*A. hupehensis* var. *japonica* (Thunb.) Bowles et Stearn として區別する。Hylander は *A. hupehensis* の花粉が不完全であるとして居るが自分等が栽培して居るものの花粉は 84～95% 完全であり，この事は一重咲の *A. hupehensis* が支那に廣く分布して居る種であり，シウメイギクはそれから導かれた異常形である事を證明する。シウメイギクは日本に見出される唯一の形であつてこれは輸入され歸化したものと思はれ，支那各地でも見られ雲南の奥地では古くから墓地附近に植えられたものであらう。次に歐洲に於けるシウメイギク及び近似品の栽培の歷史に就て多くの文獻を引用して詳述して居る。*A. vitifolia* はヒマラヤ・ビルマ北部・雲南に生じ，1829 年に歐洲へ輸入された。Gordon は 1847 年既にこの種とシウメイギクの雜種を作つて居た。其後出來た多くの園藝品種は雜種起源である事は明かで，*A. elegans* の名でこれをまとめる。この類では花粉は不完全なものが多く完全な花粉は僅か 0～30% で莖は高さ 1.5m に達する。尙シウメイギクの花粉は 67～100% 完全で，雲南の栽培品では 100% 完全，日本東京のものでは 67% 完全であつた。終にこの類の簡單な檢索表があげてあるが，その特徵は上述した通りである。

昨年度には更に大物として Babcock 博士の 'The genus *Crepis*' Part I & II in Univ. Calif. Publ. Bot. **21**: 1～198, pl. 1, fig 1～11, t. 1～12; **22**: 199～1030, pl. 12～305, t. 13～19 及び Copeland 博士の 'Genera Filicum' 272p., 10 t. in Annales Cryptog. et Phytopatholog. Vol. 5 が出版されたが，これ等に就ては項を改めて紹介する。園藝的のものでは Van Melle 氏の 'Review of *Juniperus chinensis* et al.' 108p., 12 t. があり，これに對する批判も出て居る。

○ヒメボツス（原　寬）

Samolus 屬のものは通常我國にヒメボツス (*S. Valerandi* L. var. *typicus* Knuth) とハヒハマボツス (var. *floribundus* Knuth) と二品が產する事になつて居るがこれは疑しい。ハヒハマボツスの方は，1886 年 Maximowicz が *S. floribundus* と同定し，我國では上記の樣に變種としての學名がよく用ひられて居る。松村博士は明治 23 年に *S. Valerandi* の學名で報告されたが，これは種を廣義に扱ひ *S. floribundus* をも含めた意味で用ひられたので，內容はハヒハマボツスを指して居る。又 Knuth (1905) も *S. Valerandi* の下に日本產標本を引用して居るがこれも同様の意味で，var. *floribundus*